

## 空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す ：『遍照發揮性靈集』巻一「野陸州に贈る歌」を中心 に

マツダ, ウィリアム  
四川大学外国語学院日文系 : 副教授

<https://doi.org/10.15017/2202967>

---

出版情報 : 中国文学論集. 47, pp.24-36, 2018-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

——『遍照發揮性靈集』卷一「野陸州に贈る歌」を中心に——

ウイリアム・マツダ

## 一 序論 律令時代の日本とその周辺

奈良朝から平安朝初期まで続いた律令国家時代の日本の境界はどこにあったのか——言うまでもなく『日本書紀』や『続日本紀』をはじめ現存する当時の文献類によれば現在の東北地方に該当する陸奥国が既に律令国家体制に編入されていたことは明らかである。しかし、その地方を本拠地とする蝦夷の反乱が相次いだことからわかるように、平城京、のちに平安京を拠点とした律令国家（ヤマト王権）が完全に統治していたとは言い難い。もとより京都から見た中央史観では、蝦夷の行為は反乱や自己防衛ではなく、朝廷の権威を挑発する謀反とされた。数十年に亘り、何度も都より官軍が陸奥に派遣されたが、その軍隊は人数的にも技術的にも優勢だったにも拘わらず、敗北を繰り返した。その中で幾度かの戦勝もあり、陸奥の支配権は辛うじて持続されたが、以後またしても反乱が起り、朝廷は再び官軍を増員せねばならぬ状態に追い込まれていたのである。ところが、平安朝初期に入ると、辺境地の統治をめぐる困難に加え、退位した平城帝（七七四〜八二四、在位は八〇六〜八〇九）が八一〇年に起こした「葉子の変」の影響を受けて、律令体制は既に崩壊の危機に瀕していた。この難局に処すべく、著しく中華思想に傾倒していた嵯峨帝（七八六〜八四二、在位は八〇九〜八二三）は「文章経国」すなわち魏文帝（曹丕、一八七〜二二六）の文学評論『典論論文』にみえる名句「文章経国大業、不朽之盛事（文章は経国の大業、不朽の盛事なり）」の理念に基づいて、国家体制の再建に努めていたのである。

その一環として、芳醇な漢籍の教養と流麗な漢詩文を創作する才能を持ち合わせた文人官僚が陸奥守に任命された。東北の辺境地をただ軍事的に制圧するだけでなく、文人を任命することで現地の蝦夷たちを文化的に馴化しようとしたのが狙いだったと思われる。この嵯峨帝の新しい政策の下に初めて陸奥守に任命されたのは、日本初の勅撰漢詩集『凌雲集』（弘仁五年、八一四）の編纂に携わっていた小野岑守（七七八―八三〇）であった。

岑守の赴任に際して、同じく嵯峨帝の漢詩文壇のメンパーである日本真言宗の開祖空海（七七四―八三五）が岑守への祝賀の文章を贈っている。空海ならではの優雅な漢文で綴られた序文と、それに続く詩歌では、東北の辺境地が度重なる蝦夷の反乱によって無法状態に陥っていることを嘆き、この地域を律令国家の枠組みに戻すためには文才と教養に優れた岑守こそ適任だと主張している。岑守の赴任を祝賀し岑守の才能を称えることがこの文章の主たる目的ではあるが、もちろんあらゆるところで空海の才識が窺われる。ところが、この文章は空海の達者な修辞よりも、むしろ空海が日本列島に中国の「華夷思想」（漢民族「華」を中心とし、周辺に居住する異民族「夷」を未開の部族とする世界観）を転置しようとしたことが最も注目すべき特徴である。例えば、空海が華夷思想の中核的な概念と用語を採用し、辺土に住する蝦夷を「戎」と「狄」に分類することにより、豊かな文化を持つ律令国家の日本が「華」、その周辺に盤踞する諸民族が「夷」となり、日本の朝廷を中心とする中国的世界観が再現されているのである。

空海と聞けば、「入唐求法」、「惠果阿闍梨との運命的な出会い」、「真言密教」、「能書」、「流麗な漢詩文」、「抜群の語学力」など数々のエピソードが想起されるであろう。だが、この文章の内容を考察すると、空海の政治思想、朝廷（特に、嵯峨帝）との関係、そして空海の言語観といった側面も垣間見ることができるといえる。この文章を通じて、大陸の文学・政治思想が如何に日本に伝来し、当時の日本人に受け入れられ、再構築されたのかを考察したい。

## 二 「野陸州に贈る歌」序文

この文章は空海の詩文集『遍照発揮性靈集』（以下、『性靈集』）巻一に収録されている。『性靈集』は空海の入寂空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

後、高弟の真濟（八〇〇〜八六〇）に編纂された書籍であり、このことを踏まえると、この文章は単に日常的な作品ではなく、空海の傑作の一つとして重んじられていたことがわかる。構成は、まず流麗な漢文体で綴られた序文が置かれ、次に嵯峨帝の徳政と岑守の才能を称える詩が続くというものである。先ず、序文の考察をすすめよう。

戎狄難馴、邊笳易感、自古有、今何无。公抱大廈之材、出鎮豺狼之境。堂中久闕定省之養、魏闕遠阻龍顔之謁。雖云天理合歡然、人情豈无感歎。貧道與君遠相知、山河雲水何能阻。白雲之人、天邊之吏、何日无念。聊抽拙歌、以充邊霧之解頤。

戎狄の馴れ難く、辺笳の感じ易きこと、古より有り、今何ぞ無からん。公、大廈の材を抱き、出でて豺狼の境を鎮めんとす。堂中には久しく定省の養を闕き、魏闕には遠く龍顔の謁を阻てたり。天理は歎然に合へりと云ふと雖も、人の情、豈に感歎無からんや。貧道、君と遠てより相知れり、山河雲水、何ぞ能く阻てむ。白雲の人、天邊の吏、何れの日か念ふこと無からむ。聊か拙歌を抽でて辺霧の頤を解くに充てん。

先述の通り、冒頭部分に出てくる「戎」と「狄」は中華の北辺を本拠地とする非漢民族の部族を指し、空海が律令国家の東北辺境に居住する蝦夷をそれらと同等に位置づけようとしていたことがわかる。この蝦夷が「馴れ難い」という記述から、空海の見解では蝦夷を順応させるにはただ単に武力的に鎮圧するだけでなく、文章経国を原則とする文化圏に編入させるのが不可欠だという考えも明らかになる。続いて「辺笳感じ易し」とは范曄『後漢書』巻八十四の「列女伝」中にみえる蔡琰（字は文姬、一七七?〜二四九?）「悲憤詩」の一節「胡笳動兮邊馬鳴（胡笳動きて辺馬鳴く）」の句を想起させる。「笳」は葦の葉で作った笛のことであり、辺境の地のイメージを強める。空海の序文中では「辺笳」とあるが、間違いなく「胡笳」と同様の意味合いで使われている。中国では、国境地帯の実態と異民族に題材を取った「辺塞詩」で「胡笳」が境地の孤独と寂寥を象徴するイメージとして定着し、唐代にもよく使われた。例えば、唐の王翰（六八七〜七二六）「涼州詞」に「胡笳」がみえる。

秦中花鳥已應闌 秦中の花鳥 已に応に闌たがはなるべきも、  
塞外風沙猶自寒 塞外の風沙 猶ほ自ら寒し。  
夜聽胡笳折楊柳 夜 胡笳の折楊柳を聴かば、  
教人意氣憶長安 人をして意氣 長安を憶はしめん。

(王翰「涼州詞二首」其二、『全唐詩』卷一五六)

題目に登場する「涼州」は現在の甘肅省武威市に当たり、いわゆる河西回廊の中継地という地理的条件もあって、昔から中央アジアへの交通の要衝として重要視されてきた。遠く秦(陝西、すなわち都の長安がある地域の別称)では春の風流を象徴する花と鳥がもう盛りを迎えているが、かたや「塞外」(万里の長城の外側、つまり国境の外)にある涼州では風に吹き上げられた砂はまだ冷たいと嘆息する。この対句では華やかな都と荒涼たる辺境が対照的に並列されるとともに、季節のズレも示されている。そして次の句で「胡笳」を登場させることで郷愁の情を誘う効果を発揮する。空海の作品に話を戻すと、「辺笳感じ易し」の句は、このように中国詩文において伝統的な「胡笳」のイメージを踏襲したものである。

次に、「公、大廈の材を抱く」の一節では、文人の岑守が宮殿を作る優れた木材に譬えられるのに対し、蝦夷を「豺狼」に譬えることで彼らが動物に準ずる存在だとまでおとしめられている。そして、この序文でもう一つ注目したいのは「堂中には久しく定省の養を闕き、魏闕には遠く龍顔の調を阻てたり」の一節である。周知の通り、「定省」は『礼記』曲礼上にみえる「昏定晨省(昏に定めて晨に省みる)」の略、つまり「夜は親の寢床を用意し、朝はご機嫌を伺う」という孝養を怠らないさまをいう言葉である。一方「魏闕」はもともと宮城の外郭に位置する門を指すが、ここでは転じて「朝廷」を意味し、「龍顔」は天皇すなわち嵯峨帝を指す。要するに、岑守が遠いところに赴くのでしばらく親孝行ができず、天皇への謁見もできないことを悲嘆している。この表現から、朝廷が儒教に基づく道德観・倫理観の中心地であり、その中心地から離れば離れるほどその道德からも遠ざかってしまうことを暗示していると考えられる。

空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

三 「野陸州に贈る歌」詩

序文ののち、岑守の才能を称賛する長編の詩が始まる。まず、東北の辺境地を統治する状況が次のように述べられている。

日本麗城三百州	日本の麗城 三百州、
就中陸奥最難柔	なかんづく陸奥 最も柔らげ難し。
天皇赫怒幾按劔	天皇 赫怒して 幾たびか劔を按じ、
相將幄中争馳謀	相將 幄の中に 争うて謀を馳す。
往帝伐 今上憂	往帝も伐ち、今上も憂へたまふ。
時々牧守不能劉	時々の牧守 劉 <small>か</small> つ能 <small>あた</small> はず、
自古將軍悉啾々	古より將軍 悉く啾啾たり。

(空海「贈野陸州歌」第一句〜第七句)

早速この詩の冒頭部分より「陸奥」は紛れもなく日本の領土である反面、律令国家の統治構造への実質的な編入に伴う困難も示す。ところで、律令国家の周辺に居住する部族は北方の蝦夷だけではなく、南方の九州にも隼人と熊襲があり、史料にはこの部族との軍事的な衝突に言及する記述も見受けられる。例えば、七二〇年に大隅国(現在の鹿児島県東部)で「隼人の反乱」が勃発したが、朝廷は『万葉集』の歌人の一人としても知られる大伴旅人(六六五〜七三一)を征隼人持節大將軍に任命し、隼人の征討に当たさせた。その結果、隼人と熊襲は奈良朝初期までにヤマト王権の支配下に組み入れられ、ヤマト朝廷による支配体制が確立した。坂上康俊が指摘するように、八〇五年に隼人が朝廷に朝貢する制度が終わり、薩摩・大隅では班田収授が実施された。換言すると、隼人はもはや異民族としての性質を失い、一般の公民になったのである。一方、東北では、この詩の「相將 幄の中に争うて謀を馳す」や「古より將軍 悉く啾々たり」の句からもわかるように、この詩が制作された時点では朝廷は主に武力に

依存した統治を目指していたが、未だ決定的な勝利を収められず、敗北を繰り返していたことが明らかになる。蝦夷が如何に文明を欠く地域であるのかは、次のように描写されている。

毛人羽人接境界	毛人	羽人	境界を接し、
猛虎豺狼處處鳩	猛虎	豺狼	処処に鳩まる。
老鷓目 猪鹿裘	老鷓の目、	猪鹿の裘。	
髻中插著骨毒箭	髻の中に挿著す	骨毒の箭、	
手上每執刀與矛	手の上に毎に	刀と矛とを執れり。	
不田不衣逐麋鹿	田つくらず	衣おらず	麋鹿を逐ひ、
靡晦靡明山谷遊	晦と靡く	明と靡く	山谷に遊ぶ。

(同、第八句〜第十四句)

この句は当時の平安京の人々がどのように蝦夷を認識していたのかを覗かせる内容である。蝦夷を「毛人」や「羽人」と呼ぶほか、「猛虎」「豺狼」といった野獣を思わせる描写が顕著に見られる。また空海の巧みな修辭に注視すれば、「あつまる」を「鳩」の字で表記するのも、蝦夷が理性を欠き、まるで野鳩の群れるようにただ本能のみに従って行動する動物のようなイメージを形成させていることがわかる。「毛人」と「羽人」は従来、中国最古の地理書である『山海経』(前四世紀〜三世紀頃成立)が初出とされている。『山海経』海外東経に、「毛民之國在其北、爲人身生毛。一曰在玄股北。(毛民の國は其の北に在り、人と為りは身に毛を生ず。一に玄股の北に在りと曰ふ)」とあることを踏まえると、空海が蝦夷をこれと同様に位置づけようとしていることが明らかになる。周知の通り、日本列島も「倭」という名称で『山海経』海内北経に現れ、中華の周辺にある異民族の地と位置付けられている。しかしここでは『山海経』の地理的ロジックを利用し、がんらい周辺地と見なされていた日本が中心となり、東北地方を改めて辺境地にしたことは注目すべきことである。しかも空海は地理的な位置付けに留まらず、「髻中に骨毒の箭を挿み著く」や「手上に毎に刀と矛とを執る」などの表現によって蝦夷がいかに危険な未開部族であるかを強調

空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

している。特に注目されるのは「田つくらず、衣おらず、麋鹿を逐ふ」の句である。ここでは未開な蝦夷が東アジア（漢字文化圏・儒教文化圏）の社会的秩序の基礎である稲作を拒否していることを暗示している。そして次の句では蝦夷が狩猟の対象とするものは鳥獣だけでなく、実は辺地に居住する人間も時には獲物となっていたことを告白している。

羅刹流 非人儔

羅刹の流か、人に非ざる儔か。

時々來往人村里

時時 人の村里に來往して、

煞食千萬人與牛

千万の人と牛とを殺食す。

走馬弄刀如電擊

馬を走らせ 刀を弄ぶこと 電擊の如く、

彎弓飛箭誰敢囚

弓を彎き 箭を飛ばして 誰か敢へて囚へん。

苦哉邊人每被毒

苦しい哉 辺人 毎に毒を被りて、

歲々年年常喫愁

歲歲 年年 常に愁を喫す。

（同、第十五句〜第二十一句）

空海は常に儒教思想を中心に据えて東北の辺境地を律令国家に編入させることを正当化しようとするが、ここでは「羅刹」という仏教用語も出てくる。羅刹はインド仏教でもともと十二天の護法善神という善意の存在であったが、中国の漢訳仏典では魔物の性質が強調されるようになり、人間まで食したとされる。この句では蝦夷の非人間性を主張し、蝦夷が無差別的に辺境の村里を襲撃する状態を悲嘆する。しかし、現存する文献や先行研究には蝦夷が習性的なカニバリズム行為に及んだという決定的な記述はみられないので、この表現にはかなり脚色や誇張があるように思われる。しかし空海の描写する蝦夷は、狩猟採集と略奪とを生活基盤とする未開な民族として描かれているといっても過言ではなからう。先述の通り、朝廷が幾度も官軍を紛争地帯に派遣させたにも拘わらず、軍事的な勝利は得られず、秩序と官僚的な合理性を（少なくとも論理的には）重要視する律令国家に対しての威嚇が続いた。かくして、嵯峨帝は文人官僚小野岑守を辺境地の鎮撫に充てるという政策方針の大転換に至ったのである。



我皇爲世出能鑒

我が皇 世の爲に出でて能く鑒みたまひ、

亦咨焉刃局

亦た焉を刃局に咨る。

千人萬人擧不應

千人 万人 挙りて応せず、

唯君一箇帝心抽

唯だ君一箇（＝岑守）のみ 帝心に抽んでらる。

山河氣 五百賢

山河の氣、五百の賢、

允武允文得自天

允に武 允に文 天より得て、

九流三略肚裏吞

九流 三略 肚の裏に吞めり。

（同、第二十二句と第二十八句）

ここでは岑守が拔擢された経緯と理由を述べる。嵯峨帝は解決策を探るべく先代天皇の戦略に照らし合わせて、相当な人数を総動員してもただ軍事的に対応するだけでは成功は見込めないという結論に至った。そうしたことから、文武を兼ね備え、「九流」と「三略」の全体を修得した岑守が任命されたのである。九流と三略を文字通りに解釈すれば、渡邊・宮坂注（一六六頁）が指摘するように「九流」は「儒家・道家・陰陽家・法家・名家・墨家・縦横家・雑家・農家」であり、「三略」は周の太公望の兵法書を指す。しかしここでは恐らく空海は中国の学問全体を網羅的にいう比喩的な名称として用いていると思われる。また「允武允文」とは、今日の「文武両道」を思わせるが、古く『詩経』の魯頌「泮水」という作品に見える言葉。春秋時代の魯の僖公（前六五九～前六二七に在位）が領主なく混乱する周辺諸国を鎮圧したことを祝賀するものである。単に武力に秀でるだけでなく、文化面においても圧倒的な優越性を持つことを意味している。続いて空海は岑守の就任への期待を述べる。

鵬翼一搏睨此境

鵬翼 一たび搏ち 此の境を睨まば、

毛人面縛側城邊

毛人 面縛して 城辺に側てり。

凶兵蘊庫待冶鑄

凶兵 庫に蘊められ 冶鑄を待ち、

智劍滿胸幾許千

智劍 胸に満ちて 幾許千ぞ。

空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

不戦不征自無敵 戦はず 征せず 自ら敵無く、  
或男或女保天年 或男 或女 天年を保たん。  
昔聞嬌帝干儂術 昔聞く 嬌帝の干儂の術を、  
今見野公略无足 今見る 野公のの略たゞの无ききを。

(同、第二十九句、第三十六句)

「鵬翼一搏」は『莊子』逍遙遊篇の言葉。伝説上の鳥「鵬」の巨大な翼が雲のように大空を覆う様子を描写する一節である。「鵬」の本来の意味をめぐり諸説はあるが、ここでは岑守の才智と道徳が大鵬の翼のように東北の辺境地を覆い尽くし蝦夷を教え諭すことを象徴すると考えたい。岑守が武力を行使せず、その人徳のみによつて蝦夷を臣従させることを願う。そして、降伏した蝦夷から没収された「凶兵」(武器)は、官庫に集められ、溶かされて鋤や鍬など社会に役立つ道具に再鑄されることも期待している。要するに、文化面においても蝦夷を完全に律令国家体制に同化させることを願う内容なのである。次の句に出てくる「智劍」も、学問が武器を超える能力を備えていることを暗示する。ところで、「智劍」という語は本来仏教用語であつて、知恵が煩惱を絶ち、正邪の決断を下すことを劍に喩えていう。佐和隆研編『密教辞典』によると、「智劍」は梵語 *Khadga* (鳩伽) の漢訳であり、「煩惱を摧破する意から解脱の標幟として諸尊の三耶味形に用いる」と定義づけられる。ところが、前述の「羅刹」と同様に、「智劍」も転じて世俗的な意味合いを付与され、空海が仏教用語を政治的な場面に用いる工夫が窺える。続いて「嬌帝の干儂術」とは、伝説の皇帝舜がただ盾を取つて舞つただけで敵軍を降伏させることができたという故事を指し、ここでもまた武力を使わずに敵を屈服させることを意味する。こうして岑守が一日も早く蝦夷の反乱を鎮め、鄙地に平和をもたらして欲しいという期待を述べた上で、詩歌は次のように結ばれている。

京邑梅花先春開 京邑の梅花 春に先んじて開き、

京城楊柳茂春日 京城の楊柳 春の日に茂し。

邊城遲暖無春藥 辺城 遅く暖かにして 春の藥はな無く、

邊壘早冬无茂實 辺壘 早く冬にして 茂実無し。  
高天雖高聽必卑 高天 高しと雖も 聴くこと必ず卑し、  
況乎鶴響九臯出 況んや 鶴の響きの九臯より出づをや。  
莫愁久住風塵裏 愁ふ莫れ 久しく風塵の裏に住まることを、  
聖主必封萬戸秩 聖主は必ずや万戸の秩を封ずるならん。

(同、第三十七句く最終句)

都と辺境地の対比表現には唐代の辺塞詩の特徴に近いものが見受けられる。「京邑の梅花は春に先んじて開き、京城の楊柳は春の日に茂し。辺城は遅く暖かにして春の藁無く、辺壘は早く冬にして茂実無し」の四句には、都と陸奥のそれぞれの風景が対照的に述べられている。都には既に春が訪れ梅の花も開き、また、もう一つの春の風物詩である楊柳も暖かい陽光を浴びている。一方、東北の辺境ではまだ冬の寒さが続いており、花は咲かず、また、秋には、すぐさま冬が来てしまうために、柿や栗などの果実も収穫できないという。言うまでもなく、地理的にいうと陸奥は近畿より緯度の高い地域に位置しているので当然春が遅く訪れるのであるが、もう一つの解釈を提案したい。前述の王翰の詩に、都の長安と違い辺境の涼州にはまだ春が訪れていないという表現があった。この場合にも、確かに涼州は長安より緯度が三度高いところであり、この一首で嘆かわしく詠じられる季節の違いも地理的な条件によるものだとすることを否定できないが、恐らく作者の王翰の意識では、辺境地の寒さは地理的且つ気候的な違いによるというよりも、都(天子)の徳政から離れているのが原因だと考えていたように見受けられる。もちろん空海と王翰の作品には注目すべき違いもある。即ち、王翰の作品は鄙地への左遷を悲嘆しつつ都の栄華を偲ぶものであるが、空海の作品は岑守の赴任を祝賀するもので、しばらくの間「風塵」の中で暮らさなければならぬが、それは嘆くことではなく、「聖主は必ずや萬戸の秩を封ずるならん」と結んで、任期満了の際には天皇からの莫大な恩賞が約束されていることを断言する。

平安時代の漢詩に「筍」を辺境地の象徴として使う作品はさほど多くないが、約十五年後の八二七年に編纂された勅撰漢詩集『経国集』に巨勢識人(七九五く没年不明)の「奉和塞下曲」がある。

空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

胡兒塞月曉吹笳 胡兒 塞月 曉に笳を吹く。  
梅柳雖春未見花 梅柳 春と雖も 未だ花を見ず。  
爲報國恩不敢死 國恩を報ぜんが為に 敢へて死なず、  
邊亭萬里老風沙 邊亭の万里 風沙に老ゆ。

(巨勢識人「七言 奉和塞下曲一首」、『経国集』卷十)

題目からわかるように、識人の作品は李白(七〇一〜七六二)「塞下曲」に和したものである。<sup>8)</sup>原作の「塞下曲」は合わせて六部構成で若干長く、紙幅の都合でここでは全文の掲示を省くが、識人の作品との相違点を取り上げて論じてみたい。まず、李白と識人のそれぞれの作品に葦笛(李白の作品では「笛」、巨勢の作品では「笳」)が登場する。そして、接頭辞として「胡」を冠する語は、識人の作品には「胡兒」は出てくるが、李白の作品には「胡馬」(其二、第二句)「胡霜」(其三、第三句)として登場する。識人の第一句にも「胡」(辺境地に居住する異民族)、「塞」(中央政權が辺境地に構えた要塞)、「笳」(葦笛)が登場し、辺塞詩の主なイメージは殆ど揃っているとさえ言う。次の句に「梅柳は春と雖も未だ花を見ず」とあり、先述の王翰「涼州詞」と同様に国境には春の訪れが遅いとを嘆く。しかし、次の句では辺境地への赴任は国家のためであって、任務を全うせねばならぬという義務感も顕著である。中国の辺塞詩には主人公の左遷、あるいは異民族との武力衝突を悲嘆するとともに、華やかな都を恋慕う心境を詠ずる作品が少なからず存在するが、このような辺塞詩のテーマとイメージを受け継いだ日本の漢詩は、辺境地への赴任を「左遷」ではなく、朝廷に対する忠実な「奉仕」と捉え、肯定的に構想し直したといえる。識人の作品は空海の商品より十五年後に制作されたものであるが、この点でも空海が岑守に寄せた詩歌と共通している。

#### 四 結語

本論文では、空海が如何に大陸の華夷思想の理論を律令国家時代の日本に転置して、蝦夷の反乱を「文化的」に再解釈しようとしたのかを究明しようとした。空海は、華夷思想の言説を援用し、律令国家の統治範囲の周辺に住

む蝦夷を「狄」と「戎」に描写することで、律令国家時代の日本を中国と同等の文化大国に位置づけようとする。当時の日本からみると、文化大国だった中国の周辺に異民族が住んでいたのと同じように、律令国家の日本の周辺にも異民族が存在すると主張すると、律令国家も文化的な優越性を宣言できるのである。しかし、このような宣言はともかく、東北の国境で蝦夷が朝廷の権威を挑発していたことは否定できない。先に言及したように、嵯峨帝は文人の岑守を陸奥守に任命し、蝦夷の文化的な同化を望んでいた。空海が岑守に贈った詩の文言を分析すると、「文章国家」の根本的な思想が下敷きになったといっても過言ではない。本論文の考察で明らかになったように、この一首は『山海経』『礼記』『後漢書』といった中国の古典を多く踏襲するとともに、唐代に流行した辺塞詩というジャンルも積極的に受容していることがわかった。

## 注

- (1) 『遍照發揮性靈集』巻一。本論考における『性靈集』の引用と書き下しは、渡邊照宏・宮坂宥勝校注『三教指帰・性靈集』（岩波書店、日本古典文学大系71、一九六五年）を参考した。渡邊と宮坂は鎌倉時代に東寺長者を務めた僧隆澄（一一八一〜一二六六）による『性靈集』の写本である醍醐本（重要文化財、醍醐三宝院所蔵）を底本に用いた。
- (2) 「劉」字は、渡邊・宮坂注一六六頁では「ころす（殺）」と訓読し、「滅ぼす」と注解するが、今鷹真ほか『弘法大師空海全集』第六巻（筑摩書房、一九八四年）一六七頁では「かつ（克）」と訓読する。「征服する」の意。ここでは後者に従う。
- (3) 坂上康俊『律令国家の転換と「日本」』（講談社、日本の歴史05、二〇〇一年）一〇四頁。
- (4) この句について今鷹注一八五頁には「局」の字、韻が合わない。或いは誤字か。このままならば、軍事担当の役所を意味するものと思われる」と指摘する。
- (5) 小野岑守の姓を「野」の一字に省略するのは中国人風の詩人に見せ掛けるための試みと思われる。興膳宏は『文華秀麗集』所収の作品について「もう一つ『文華秀麗集』において始めて目を引く特色は、各作者が巨勢識人なら「巨

空海の漢詩文を通して平安朝の「境界」を読み直す

識人」、朝野鹿取なら「朝鹿取」、小野岑守なら「野岑守」、桑原腹赤なら「桑腹赤」、良岑安世なら「良安世」といったぐあいに、中国人風の姓名によつて署されていることである」と指摘する（興膳宏『中国文学理論の展開』、清文堂出版、二〇〇八年、三五―一頁）。

(6) 渡邊・宮坂注、四九三頁。「鵬」は『性靈集』卷一所収「遊山遊慕仙詩」にもみえるが、「野陸州に贈る歌」では律令国家の權威、つまり政治的な意味合いを持つと思われる。

(7) 佐和隆研編『密教辞典』（法蔵館、一九七五年）、その一六四、四九五頁。

(8) 『全唐詩』卷一六四に見える李白「塞下曲六首」の原文は次の通り。「①五月天山雪、無花祇有寒。笛中間折柳、春色未曾看。曉戰隨金鼓、宵眠抱玉鞍。願將腰下劍、直爲斬樓蘭。／②天兵下北荒、胡馬欲南飲。橫戈從百戰、直爲衝恩甚。握雪海上餐、拂沙隴頭寢。何當破月氏、然後方高枕。／③駿馬似風飜、鳴鞭出渭橋。彎弓辭漢月、插羽破天驕。陣解星芒盡、營空海霧消。功成畫麟閣、獨有霍嫖姚。／④白馬黃金塞、雲砂遶夢思。那堪愁苦節、遠憶邊城兒。螢飛秋窗滿、月度霜闌遲。摧殘梧桐葉、蕭颯沙棠枝。無時獨不見、流淚空自知。／⑤塞虜乘秋下、天兵出漢家。將軍分虎竹、戰士臥龍沙。邊月隨弓影、胡霜拂劍花。玉關殊未入、少婦莫長嗟。／⑥烽火動沙漠、連照甘泉雲。漢皇按劍起、還召李將軍。兵氣天上合、鼓聲隴底聞。橫行負勇氣、一戰淨妖氛。」